山崎郷土研究会報

No. 75

2. 4. 25

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62－2000

近世初頭の山崎藩（三十三）

島田　清

二、池田輝澄時代（三十二）

○池田光政の忠言

池田輝澄家中に発生した小金貸借のもつれから新参・古参の両派閥が対立し、事態が深刻化してゆく過程において、これを救済するための重要な申し入れが行われた。池田家の嫡流を継ぐ名君、池田光政の提言である。光政がどのような人物であったか。輝澄との関係はどうか。また、光政は、この事態推移をどのように受け止めていたか。そして、どう処置することが適切であると考えたか。次は、これを述べねばならぬ。

目　次

① 近世初頭の山崎藩……島田　清…1
② 戸原物語（五）……志水出世…4
③ 入会の争い……久保寅夫…5
④ 長屋王のこと（一）……安井清介…9
⑤ 田井遺跡出土の銅鐸形土製品……片山昭悟…19
⑥ 野々上の歴史を求めて……進藤光子…24
⑦ 秋の研修旅行記……志水美好…26
⑧ 蔵書の活用について……28
⑨ 事務局だより……29

一、池田光政の出生

慶長十四年（一六〇九）四月四日、光政は岡山城に生まれた。父は、姫路藩五十二万石の大守池田輝政の嫡子利隆である。

これよりさき、慶長八年に、利隆の弟忠継は備前二十八万石を与えられた。このとき、忠継は五歳であった。そのため、二十歳の利隆が代って岡山城に赴き、備前の行政を預かったのであった。そして、二年後の慶長十年、榊原康政の二女鶴姫を娶った。光政

が生まれたのはこの四年後で、生誕地が岡山城であったのは、前記のごとき事情からである。

徳川家康には、文武諸道に秀でた家臣がたくさんあった。いわゆる多士済々である。中でも「四天王」と呼ばれた四人はもっとも傑出し、他家にも広く知られた。すなわち、本多忠勝・井伊直政・酒井忠次・榊原康政で、このうちの本多・榊原二家は、のちに、姫路藩主として二度も入部した。(酒井家も姫路藩主となっているが、この酒井家は酒井雅楽頭を名乗る酒井忠世―上野国前橋城主― の子孫で、酒井忠次は左衛門尉と称し、出羽庄内(鶴岡)藩主となり、子孫は明治維新まで同地に在城した)。利隆が鶴姫を娶ったときの榊原康政は上州館林城主で、鶴姫の母、すなわち康政の妻は、家康麾下の驍将として知られた松平五郎左衛門、大須賀康高の女であった。

康政の長男忠政は、康高に男児がなかったため、その養子となって大須賀氏を継いだ。(この忠政の嫡子忠次は、また、榊原家を継いで松平式部大輔忠次と名乗り、慶安二年―一六四九―姫路城主となった。)また、康政の長女は、酒井雅楽頭忠世の室となった。そして、その妹の鶴姫は、将軍秀忠の養女となった。慶長十年五月三日、池田利隆に嫁したのであった。

このときの婚礼は、まことに盛大であった。徳川家では、青山播磨守忠成を渡輿に、土井大炊頭利勝に貝桶の役を命じ、安藤重信・鵜殿兵庫頭・伊丹康勝を徒行として行列に従わせた。迎える側の池田家でも、浅野長政・幸長父子、黒田長政、加藤清正、蜂須賀至鎮、加藤嘉明らが集まって礼をたすけ、将軍家よりの引出物は、青江の御刀、左文字の御脇差、良馬二疋(ひき)であった。利隆の母は中川清秀の女であったが、弟忠継以下の五人の男児は、総べて輝政の後室督姫の出であり、この督姫が徳川家康の二女であるところから、利隆の室も将軍秀忠の養女として迎え入れられたわけで、これによって、徳川家と池田家は、二代に亘って親戚のつながりができたのであった。

光政は、こうした環境の中で呱々の声をあげた。慶長十四年三月十三日、光政の出生直前に、幕府が、鶴姫の湯浴料として備中に化粧田一千石を与えたのも、嫡子(光政)出生の報が届くと、豊前守信成を使者として、鶴姫には帷子単物、袷、銀を、その子には青江の御刀、信国の御脇差を与えたのも、「将軍家の女婿」というところより行われたものである。

二、池田光政の幼時

池田光政は、豪勇できこえた父祖の血をうけ、天性

最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ
兵庫県市町村職員共済組合指定店
良い品を・安く・安心して買える店
コーエーカメラ
宍粟郡山崎町東鹿沢26－3 ☎62－2089

英邁であった。殊に、眼光烱々として人を射、大胆不敵であったのは、祖父輝政の生き写しといわれた。

五歳になった慶長十八年正月、祖父輝政は脳溢血で姫路城内に薨じた。これによって、利隆は岡山城を引きあげて姫路城に入り、輝政遺領のうち、宍粟・佐用・赤穂の三郡を除いた播磨全土、四十二万石を相続した。忠継は、利隆と入れ替わりに岡山城へ赴き、備前二十八万石と、宍粟・佐用・赤穂三郡の十万石を加えた三十八万石を領した。この三郡は、忠継の母督姫（輝政薨去後、薙髪して良正院と号した）の化粧料であったため、督姫を迎え入れた岡山城の忠継に加えられたのであった。

翌慶長十九年、光政は京都に登り、伏見城に居た家康に、はじめて目通りした。老齢の家康は白い小袖を着し、頭巾をかぶっていたが、光政を見るなり、

〝これが武蔵守（利隆のこと）の子か。壮健なる生まれつきにて、一段のことである。〟

と述べた。戦国の習いとして、武将の子は、千軍萬馬の間を馳駆せねばならぬ。身体が強健であることはその第一条件。光政が、一見して強健と見えたのは、家康にとって第一のよろこびであった。

ついで、家康は、光政を膝元ちかく召し、その鬢髪を撫でながら、

〝三左衛門（輝政のこと）の孫じゃ。早く、大きくなれ。〟

とつぶやいて、面（顔）を凝視した。家康としては、女婿であるとともに股肱とたのみ、大阪城の豊臣家工作に中心的な役割を果させようと播磨一国を与えた輝政が、この重大事業を果すべき時期より早く急逝したことは、何としても惜しまれてならなかゃた。江戸・大阪の間が風雲急となった慶長十九年、特にこのことを痛感していたのであったが、眼前に、眼光烱々として人を射ること、輝政生きうつしのごとき嫡孫光政を見たとき、つい、「早く大きくなれ。そして、輝政のごとく活動せよ」といわずにおれなかったのである。

家康は、引出物として、光政に脇差を与えた。光政はうやうやしく拝領したが、その礼が終わるや否や、するりと抜いて凝視し、

〝これは本物じゃ〟

と、つぶやいた。小児に本物の刀を与えては危険であるとの配慮から、家庭においては竹光（中身を竹でつくった刀）を持たせていたのである。光政は、つねづね、これを不満に思っていた。それだけに、拝領した刀が本物であるか、竹光であるかに、重大な関心を寄せていた。素朴であるが、いかにも子供らしい疑問といってさしつかえない。そして、思ったことは、卒直にやらずにおれぬ光政の性格が、この行動をとらせたのである。

将軍に拝謁する際の行儀、また、拝領物を頂戴するときの作法は、もちろん、あらかじめ、教えられていた。したがって、光政は、目通りに出てから拝領を終るまでの作法を間違うことなく済ませたのである。うしろに控えていた家臣たちはホッとした。そして、あとは、光政が、静かに退座するものとばかり思っていた。ところが、少年光政の心には、かねて抱いていた本物か竹光かをたしかめずにおれぬ、という強い衝動が起こり、何のためらいも

なく、すらりと抜いたのであった。家臣たちがびっくりしたのはいうまでもない。家康も、もちろん同様であったろう。しかし、生涯、隠忍自重し、最後の勝利を手中におさめた家康は、少年の心理を瞬間的に読み取り、さらに、剛邁不屈の性格をも見抜いたのであった。そして、

〝これは、これは、危ぶないことじゃ、〟

とつぶやいて、静かに刀を光政の手から取り、鞘におさめてやった。かわいさと、たのもしさの交錯した感懐が、このとき、家康の胸中を去来したことはまちがいあるまい。

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごこう薬局

薬剤師　岸本八重子
　　岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

戸原物語(五)

ます(枡、桝、斗、升)

志水出世

一升の米は何粒ぐらいあると思われますか。千、五千、一万、二万……昨年学級の子に数えてもらいました。その米は私の作った日本晴です。一升は多すぎるので各班一合ずつ数えてもらったのです。

その平均は六四八九・二粒、一升に直してみると、六四八九二粒となります。一日三合食べるとすると、一九四六八粒食べています。

今はあまり枡(ます)が用いられなくなった。それでも日常一合とか一升とかはまだ生きて使われている。

枡の始まりは片手に一ぱいとか、両手に一ぱい、そして一人の一日分はこのつぼに一ぱいというような単位がもとになってできたのだろう。

今の枡はどうやら、江戸の初期(寛文のころ)に今まであった(図1)のを深さを二分増すが、そのかわりたてよこ一分ずつちぢめるのでかようこころえるべし……と、どうやら農民をだまして枡を大きくし年貢の増量をしたようだ。

その枡(図2)は現在通用しているものです。

ちなみに、以前のますは六二五〇〇立方分であり、新しいのは

六四八二七立方分で二三二七立方分ふえている。

枡の材料は桧、椹、銀杏、姫子松が使われたようだ。

さて昔から一升の米は六四八二七粒あると言われていた。それを語呂を合わせて、「虫や鮒」また狭戸で聞いたのは「ロシヤ文」で、六四八二三粒で四粒少ない。どうやらこれは前記の枡の容量の数と一致するので、米一粒が一立方分あるのかもしれない。

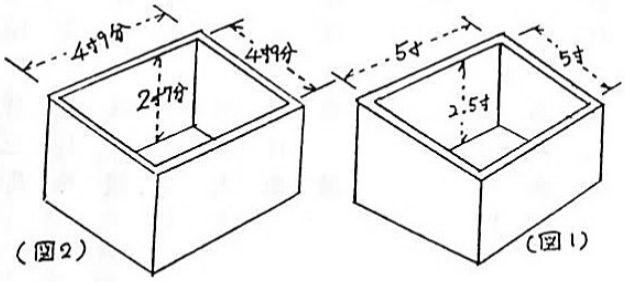
「枡」の著者　小泉氏は、一升は五五〇〇〇個～六〇〇〇〇個、重量は四〇〇匁（一・五キログラム）一粒の重さ二二～二三ミリグラム（千粒で二二～二三グラム）一坪の収量一・六キログラム、一本の稲の穂につくのは八〇粒と書いておられる。

昔は枡の検査が毎年（？）行われていた。不合格になると枡に一センチ位の丸い穴をあけられたものだ。その穴を木でつめて祖母が後生大事に使っていたのを思い出す。

枡は物の入れ方によってずいぶん入る量がちがう。一時にストンと入れて斗棒を水平に引いた時を一とすると、数回に分けて入れたら一・〇五、入れてから枡を振動させ入るだけ入れると一・一二入るそうだ。（大麦による実験）昔は米屋の丁稚は一斗の米を一斗二升に計れないと一人前とされなかったとか。今でも酒一合つけてと言って出された徳利に一合は入っていない。粒の粗い物（梅・栗・なつめなど）は一升といっても山もりで量っていたし、酒も一〇本買うと一本おまけがついたりする。

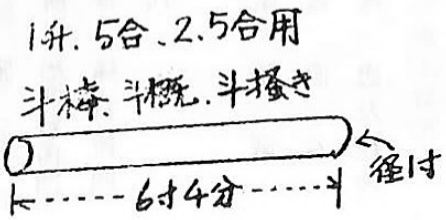
実際一升ます一〇ぱいの米は一斗枡一ぱいにならない。それは枡の壁にふれる米の量がちがうからだそうな。水なら一〇升は一斗になる理屈だ。

枡につきものに斗棒がある。寸法は下図のようにきめられている。これの使い方によって入る量がずいぶん違ったものだ。



（図2）　（図1）

※（ものと人間の文化史「枡」小泉袈裟勝著一部参考にさせてもらいました。）



入会の争い

（清野村と神戸五ケ村の場合）

久保寅夫

江戸時代農民にとって、山林、原野は堆肥薪炭の供給面からみて重大な関心事であったので、度々争いが起こりました。清野村と神戸五ケ村の間の入会の境界争いを紹介します。（山崎町宇野・久保家所蔵文書）

「差入申一札の事」の文中に連印云々とありますが、連印はあ

りません。恐らく「山論済口書」が出来て不用となったものと思いますが一応取り入れてみました。

山論済口書にある絵図面はございません。

差入申一札の事

一、銘々村々此度清野村ニ而ハ三木山と唱へ神戸五ケ村ニハ西山と申場所及出入ニ既ニ御上様江御窺ニ茂可相成候処、各々御立入被下種々御勘弁ヲ以御取曖(あつかい)被下候段難有存奉候、然ル上ハ正銘之御取曖被下候上双方共聊違背仕間敷候、為後之連印一札差入置申所仍而如件

文久元年　　清野村　庄屋　孫三郎
酉八月　　年寄　伝兵衛
　　百姓代　兵蔵
　　安黒村　庄屋　治郎大夫
　　年寄　喜兵衛
　　百姓代　嘉蔵

御料　伊和村　庄屋　喜左衛門
　　年寄　為右衛門
　　百姓代　藤兵衛

取扱人　東安積村　和太郎殿
　　五十波村　傳之助殿

分郷　伊和村　庄屋　佐左衛門
　　年寄　徳太郎
　　百姓代　房蔵

須行名村　庄屋　儀左衛門
　　年寄　伴右衛門
　　百姓代　半右衛門

市場村　庄屋　栄蔵
　　同断　治郎右衛門
　　年寄　孫右衛門
　　百姓代

島田村　庄屋　徳蔵
　　年寄　直八
　　百姓代　忠左衛門

杉田村
文四郎殿
上町村
藤兵衛殿
野々上村
九八郎殿

山論済口書

一、清野村山内同村ニ而は字三木山と唱へ神戸五ケ村ニ而は西山と申場所安黒村伊和村須行名村市場村島田村都合五ケ村申立候儀は、北は閏賀村山境より南は一ノ谷南迄往古より入来リ候趣申立、清野村よりは、北は閏賀村山境より南は松尾まで右五ケ村入来り候趣申立、右ニ付当五月中故障ニ相成、既ニ御上様え御窺ニ茂可相成之所各様御立入取扱被下御取極メ左之通

一、右山内方切北は閏賀村山境并南は寺地畑下タ之小谷より此度建置候、立石より中は谷流ニ山二ツ其上は尾え見通シ以来双方相用可申事

但シ高籏山之儀は一宮御山ニ御座候

一、右入会之山下タニ御高場并持林在之候間、双方共草柴一切刈取申間敷候事

一、清野村より年々御運上相立致切畑候儀は是迄之通聊申分無之事

一、別紙絵図面之通為後証之双方え一枚宛裏書調印之上為取替可申事

入会山之儀者双方共草下木刈始メ日限は清野村より入会村々え前日及沙汰可申候

尤往古より在来り候通い道の外一切造申間敷候、萬一勝手ニ付新道新須利造り候節は清野村始メ外五ケ村双方談し之上取斗可申事

右之通各様御取扱被下双方納得之上和談相調候上は双方一切申分無御座候、為後証之連印差入申所依而如件

文久元年
酉八月

清野村
庄屋　孫三郎㊞
年寄　傳兵衛㊞
百姓代　兵蔵㊞

安黒村
庄屋　治郎大夫㊞
年寄　喜兵衛㊞
百姓代　嘉蔵㊞

御料
伊和村
庄屋　喜左衛門㊞
年寄　為右衛門㊞
百姓代　茂兵衛㊞

分郷

伊和村

庄　屋　佐左衛門㊞
年　寄　徳太郎　㊞
百姓代　房　蔵　㊞

須行名村

庄　屋　儀左衛門㊞
年　寄　伴右衛門㊞
百姓代　半右衛門㊞

市場村

庄　屋　治郎右衛門㊞
同　断　栄　蔵　㊞
年　寄　孫右衛門㊞
百姓代　十　蔵　㊞

島田村

庄　屋　徳　蔵　㊞
年　寄　直　八　㊞
百姓代　忠左衛門㊞

取扱人

東安積村庄屋
和太郎殿
五十波村庄屋
傳之助殿
杉田村庄屋
文四郎殿
野々上村庄屋
九八郎殿
上町村庄屋
藤兵衛殿

前書之通銘々立入取扱申候所、双方和談相調候上は済口ヶ條無異失相用可候以上

取扱人

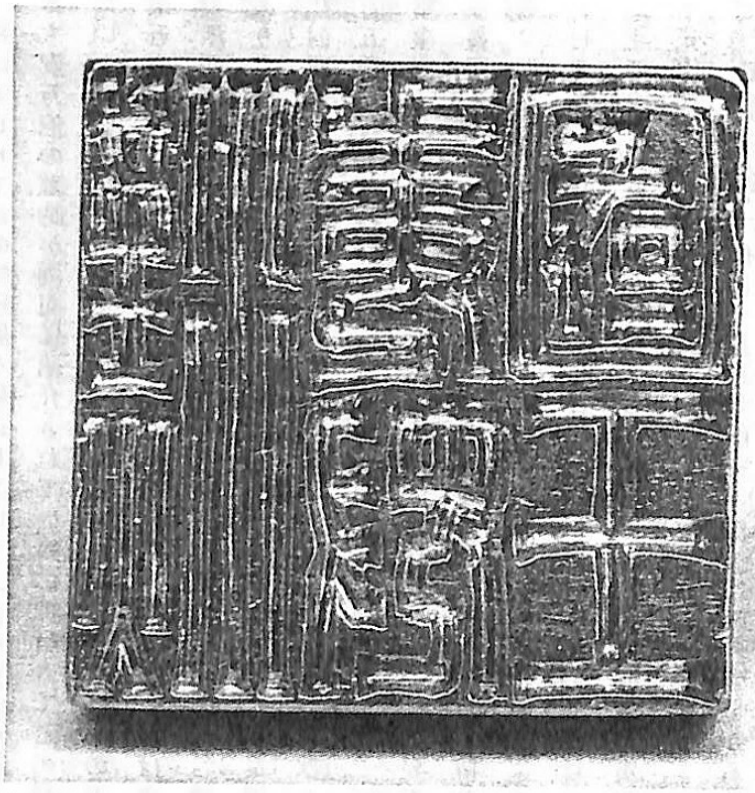
上町村庄屋
藤兵衛㊞
野々上村庄屋
九八郎㊞
杉田村庄屋
文四郎㊞
五十波村庄屋
傳之助㊞
東安積村庄屋
和太郎㊞

長屋王のこと（一）

安井清介

平成元年八月二十六日から九月二十四日までの期間、奈良国立博物館に於て特別展「発掘された古代の在銘遺宝」展が開催された。

中国の史書によると、古く日本は「倭」と呼ばれ、さまざまなクニに分かれていた。『後漢書』東夷伝に「倭の奴国が建武中元二年（五七）に朝貢し、印綬をたまわった」と記すが、この記事に符合するのが志賀島出土の金印である。また『魏志』倭人伝は、邪馬台国の女王卑弥呼が景初三年（二三九）に遣使し、各種の下賜品とともに銅鏡百枚を授かったと記す。「景初三年」、遣使帰国の翌「正始元年」とある紀年銘鏡の出土は、邪馬台国の所在論とも関連して注目される。後漢の年号をもつ奈良・東大寺山古墳出土の金象嵌「中平□年」（一八四～一八九）銘大刀や、特異な形状の剣で、朝鮮半島の百済で三六九年に作られ、わが国にもたらされた奈良・石上神宮伝来の七支刀などは、いずれも倭国の有力首長が東アジアの先進諸国と早くから密接な通交を重ね、次第に一つのまとまりのある国を形成していく過程を物語る在銘遺品として、貴重な意義をもつ。なお、西日本の弥生中～後期の遺跡に、中国・王莽の新代にごく短期間流通した「貨泉」を伴うものがあり、中国文化の急速な東方波及の一端を示す資料として興味深い。



印面（拡大）

上面・蛇鈕

この「漢委奴国王」の五文字を刻んだ金印は、江戸時代、天明四年（一七八四）黒田藩の領内、九州博多湾頭の志賀島で甚兵衛という農夫により偶然発見された純金製の白文方印で、上部に蛇をかたどった立体的なつまみを共鋳する。重さ一〇八・七瓦。辺長は中国・漢代の方一寸（二・三四糎）にあたる。模造ではあるが、この「漢委奴国王」の金印。貨泉。銅製把頭。銅矛。馬鐸。半両銭。銅鏃。磨製石剣。磨製石斧。弥生土器片。五銖銭。「景初三年」銘神獣鏡。「吾作明竟」銘神獣鏡。硬玉勾玉。碧玉管玉。硬玉棗玉。ガラス小玉。鏃形石。石突形碧玉製品。巴形銅製品。その他神原神社古墳出土品。「景初四年」銘盤龍鏡。「正始元年」銘神獣鏡。「赤鳥元年」「赤鳥七年」「元康元年」銘神獣鏡。東大寺山古墳出土品。石上神宮禁足地出土品。「癸未年」銘人物画像鏡。「夫火竟」銘四獣鏡。江田船山古墳出土品。稲荷山古墳出土品。岡田山一号墳出土品。「戊辰年」銘大刀。ジーコンボ古墳群出土品。白山古墳、穴太廃寺、野中寺、夏見廃寺、山王廃寺、等出土品。粟原寺伏鉢。興福寺金堂、元興寺塔跡出土、霊安寺塔跡出土の鎮壇具。山ノ上碑。那須国造碑。船王後、小野毛人、山代真作、美努岡万、石川年足、高屋枚人、紀吉継の墓誌。阿波国造碑。文弥麻呂墓、佐井寺僧道楽墓、太安万侶墓、小治田安万侶墓、宇治宿弥墓、等出土品。骨蔵器三点。行基墓誌残欠。「若舎人」銘石櫃。矢田部益足、宮ノ本遺跡出土の買地券。及び韓国からの出土品十一種。等々が展示されていた。

和洋菓子司
松月堂
兵庫県山崎町
電(62)〇〇六一番

私はテレビでこの特別展を報道していて、「古事記」の撰者である太安万侶の墓誌が画面に紹介されていたので行ってこの目で見たいと思い奈良へ行きました。電車の窓から近鉄奈良駅の近くに最近奈良そごう百貨店の豪壮な建物が見えました。ここは奈良市役所西側で、南には奈良時代の宮跡庭園（国特別史跡、名勝）があり、平城京では左京三条二坊の一角に当る場所で、奈良国立文化財研究所が、「奈良そごう」建設の事前調査を六十一年秋から一万五千平方米にわたり行っていて、昭和六十三年一月十二日、「長屋皇宮」と記した木簡がこの建設予定地で見つかったと発表した。「長屋王は天武天皇の孫で、天皇になれる血縁と能力を持ちながら、謀友の罪を着せられ非業の死を遂げた左大臣長屋王（六七六～七二九）の邸宅跡であることが判明した。同王の邸宅は文人が集まるサロンだったが、国政支配に反感を持つ藤原氏の策謀で天平元年（七二九）に惨劇（長屋王の変）の現場となった。「長屋皇宮」と書かれた木簡は一辺二米前後、深さ二米の土壙から出土した七十九点の中に三点含まれ、肉眼では判読できなかった赤外線

テレビで解読できた。

「長屋皇宮」の木簡は長さ十六—十八糎、幅一・八—二・五糎。うち二点は書体が似ており、同一人物の筆とみられる。

いずれも地方から貢物を送ったときに付けられたもので、書体が似ている二点のうち一点の表は「長屋皇宮俵一石春人夫」裏が「羽咋直嶋」。二点目の表は「長屋皇宮一石」、裏は一点目と同じ。羽咋は現在の石川県羽咋市で、嶋という直（あたい）（古代の姓）が長屋王に米一石を送ったなどの内容。

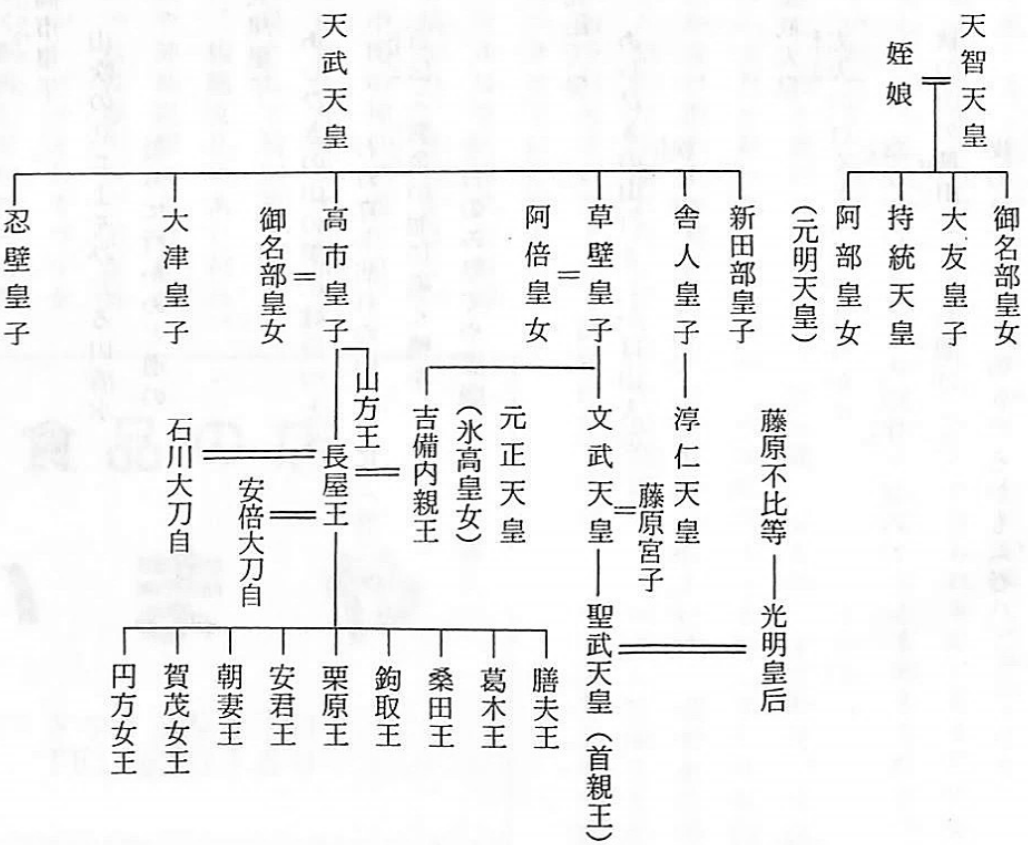
また、このほか養老元年（七一七）十二月二十二日と記されたのや犬十頭にエサを与えたとする木簡も二点あり、狩猟用の犬が飼われていたこともわかる。養老元年とあるところから、長屋王が大納言になる以前からこの邸宅に住んでいたことも初めてわかった。

調査現場からは八世紀の掘っ立て柱建物跡が七十棟以上も出土。うち木簡と同時期の建物跡は四町（当時の一町は現在の一万五千平方米）にも及ぶ。この建物跡は、二棟が軒を接して南北に並ぶ珍しい双堂（ならびどう）形式。周囲に高い格式を示すひさしが巡り、貴族以上の住居である床張りだった。

一帯からは、緑釉（りょくゆう）や三彩の豪華な色彩瓦や五十点を超える硯も出土。権勢を誇った左大臣にふさわしい華やかな瓦が屋根を飾っていたと推定される。

同研究所は、現場が平城宮に近い一等地で、大臣以上に支給されたとされる四町の宅地を構え、南側の宮跡庭園から長屋王の妃の吉備内親王邸を指す「北宮」の木簡二点が以前に出土していることから、佐保宅と呼ばれた長屋王の邸宅と断定した。

長屋王関連の系譜



長屋王は、壬申の乱を勝ち抜いた天武天皇の長子の高市皇子と、天智天皇の娘で元明天皇の姉に当たる御名部皇女の長男。妻の吉備内親王も元正天皇の妹という恵まれた血縁。神亀元年（七二四）に左大臣となり、律令国家の確立に力を入れた。しかし、皇室介入をねらう藤原氏と対立。不比等の死（七二〇）後、長屋王の勢力伸長に危機感を持った藤原一族に国家転覆を企てているというぬれぎぬを着せられ、天平元年二月、邸宅を包囲され、妻子とともに自害した悲劇の皇族とされている。

万葉集の中に長屋王に関係の深い天武天皇、天智天皇、元明天皇、聖武天皇、光明皇后、高市皇子、大津皇子の歌があります。

天智天皇の歌

香具山と耳梨山と会ひしとき
立ちて見に来し印南国原（巻一）

渡津海の豊旗雲に入日さし
今夜の月夜清明けくこそ（巻一）

妹が家も継ぎて見ましを大和なる
大島の嶺に家もあらましを（巻二）

天武天皇

紫草のにほへる妹を憎くあらば
人嬬ゆゑにあれ恋めやも（巻一）

わが里に大雪降れり大原の
古りにし里に降らまくは後（巻二）

元明天皇

ますらをの靫の音すなりもののふの
大臣楯立つらしも（巻一）

高市皇子

山吹の立ちよそひたる山清水
汲みに行かめど道の

大津皇子

あしひきの山の雫に妹待つと
われ立ち沾れぬ山の雫に（巻二）

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を
今日のみ見てや雲隠りなむ（巻三）

元正天皇

あしひきの山行きしかば山人の
朕に得しめし山づとぞこれ（巻二十）

聖武天皇

丈夫の行くとふ道ぞ凡ろかに
念ひて行くな丈夫の伴（巻六）

秋の田の穂田を雁がね闇けくに
夜のほどろにも鳴き渡るかも（巻八）

光明皇后
吾背子と二人見ませば幾許か
この零る雪の懽しからまし（巻八）

長屋王一族と親しかった倉橋部女王が
大君の命恐み大殯の
時にはあらねど雲隠ります

と万葉集巻第三に詠んでいます。

（天皇の命じるままに、あなたは逝ってしまった。まだ、亡くなる年でもないのに）の意で涙を誘う悲しい歌です。

「まるで地下に埋もれた正倉院文書だ」といわれ、平城京大官人の豪勢な生活ぶりを知る超一級の資料で、大陸の騎馬民族の影響をストレートに受けて栄養満点のミルクを飲み、ツルに米を食べさせる宮廷生活が伺える。

牛乳と書かれた木簡は、表に「牛乳持参人米七合五夕□万呂九月十五日」、裏に「大嶋書吏」とあり、牛乳を持参した者に米七合五夕（千百二十瓦）を渡すよう命じた内容。この時代は、唐の影響を受けて、貴族らの間で滋養強壮の薬として乳製品が愛好され、牛乳を約十分の一に煮詰めチーズのように加工した「蘇」として利用。平城宮から出土した木簡にも「近江国生蘇三合」と記したものがあるが、蘇の原料の「牛乳」をそのまま記した木簡が出土したのはわが国で初めてである。牛乳は常温では変質しやすく、滅菌技術がなかった古代では、そのまま飲用せず、蘇など乳製品として用いるのが普通だった。平安時代の「延喜式」に登場する「牛乳」も、「蘇」の原料として掲げられている。木簡の「牛乳」は長屋王邸に届けられて蘇に加工されたとみられるが、あえて牛乳と記していることから、そのまま飲用していたとも考えられる。ともいわれている。

また、鶴と書いた木簡は、表に「鶴二隻米四（？）升受□万呂」裏に「十月卅日」などと記され、ツルに与える米四（？）升を□万呂が受け取ったと読める。六十三年一月にも「犬六頭料飯六升」などと記した木簡二点が出土。犬に庶民の口にはなかなか入らない米飯を与えていたとして話題になったが、ツルには米をそのまま食べさせていたことになる。ツルは弥生時代の銅鐸にも描かれ、珍しくはないが、中国の神仙思想では、ツルは仙人を乗せて仙界へ運ぶ鳥として特別視されてきた。唐風文化にあこがれ、道教や神仙思想にも造詣の深かった長屋王が、不老長寿のシンボルとしてツルを手厚く飼育していたとも想像される。古来、最も尊重されるタンチョウヅルだったのではないかと言われて

食品の店
いまや
さつき通り4丁目
TEL ⑥2 0169

いる。

昭和六十三年九月十二日、奈良国立文化財研究所は木簡約三万点が新たに出土したと発表した。過去三十年間に平城宮跡全体で発掘された木簡約三万三千点に匹敵する膨大な数量で、長屋王という個人に関する一刮資料である点で、古代史研究上例のない発見となった。中でも「長屋親王宮鮑大贄十編」と記される木簡が注目される。肩書は親王の二世から五世までに与えられる「王」に過ぎなかったが、この木簡では「親王」と一ランク上に記述され、朝廷に奉る各地の産物の総称である「大贄」という表現まで使われており、古代史の常識を覆す表記になっている。公表以外にも、朝廷の負担で長屋王家の家政を運営する役所「家令所」や、「犬司」、菜園をつかさどる「薗司」など、役所や職掌をさす記述を数十種確認され、また、「奈良務所」と書いたものがあり、「奈良」の名を使った初の出土資料もある。

作家・永井路子さんは、「美貌の女帝」の中で長屋王を律令に明るく、詩文に優れた貴公子として描いている。「親王と呼ばれたのは、長屋王自身の毛並みの良さだけでなく、元明天皇の娘で元正天皇の妹という、その時代の最高の血統を持つ吉備内親王の夫なればこそだと思います。本来吉備内親王自身が天皇か皇后になっても不思議ではない立場にあったことから、むしろ両女帝が、出来れば長屋を皇位継承者にと願い、親王と呼ばせたのかも知れませんね」と推理している。

九月十三日までに、長屋王の父で持統朝の太政大臣だった高市皇子（六五四—六九六）の死後の尊称である「後皇子命」と記した木簡が含まれていることがわかった。この木簡は長さ約十糎、幅約一糎。一本の木簡が二つに折れた下半分に当たり、「後皇子後皇子命□」と達筆な文字で墨書されている。高市皇子は天武天皇の最年長の皇子で、壬申の乱には父とともに転戦して名をあげ、持統朝では草壁皇子の死後、太政大臣となった。「後皇子命」は、日本書紀の持統十年（六九六）七月十日、皇子の死去を伝える記事と、万葉集の草壁皇太子（日並皇子尊＝ひなしのみこのみこと）の死を悼む柿本人麻呂の歌の注に、それぞれ「後皇子尊」の表記で登場している。

今会の木簡群は、長屋王が式部卿だった和銅五年（七一二）から五年間くらいの間に作成されたことがわかっている。これよりさかのぼる文武天皇在位（六九七—七〇七）ごろに編纂が着手されたとされる万葉集や、逆に木簡群の数年後の養老四年（七二〇）に完成した日本書紀の両方に「後皇子尊」として登場していること

清酒
山陽盃
SANYO HAI

とは、後世の写本でしか伝わっていない両書の成立過程や時期を詳しく知る上で重要な手がかりとなる。

長屋王は『続日本紀』には慶雲元年（七〇四）正月に無位から一躍正四位上の叙位にあずかっている。皇・貴族を優遇するための蔭位（おんい）の制によるのだが、その制では親王（皇子）の子はまず従四位下に叙すと定められている。現に長屋王の弟鈴鹿王は和銅三年に無位から従四位下へ、長親王の子栗栖王は養老七年に従四位下へ進むなど、その例は多い。これにくらべて長屋王が三階も上の正四位上であるのは、彼が他の親王の子より高い身分にあるとみなされていたことを物語る。これは長屋王の特殊な地位を語るものであろう。実際には親王でないのに親王に近い処遇をうけ、これがために王の身辺の人々は王を親王あつかいして、あるいは親王と呼び、殿下と称したのであろう。はじめは内々のことであろうが、木簡に書き、写経に記すようになると、次第に公然化する。長屋王は二世なのに親王気どりでいると思われてもしかたがない。王にとってそれは実に危険なことであった。系図を見ても文武にとって、長屋は手強いライバルであったことがわかる。悲劇の源の一つは長屋王の身分の高さにあった。「長屋親王」木簡の意味は大きい。

研究所の調査が進むにつれ、当時の貯蔵や運搬などの様子も詳しく書かれた木簡が発見された。天然氷を貯蔵していた「都祁氷室」（つげのひむろ＝奈良県天理市福住町）の運宮や、奈良漬の起源といえる糟漬けのウリなどについての記録の木簡も見つかった。

氷室に関する木簡は長さ一・二五米、幅十・五糎という最大級のものと、長さ約八十糎、幅九・四糎のやや小ぶりな二点。大きい方には、氷室は二か所あって、それぞれ深さ一丈（約三米）、周囲六丈（約十八米）。一方の氷室には厚さ三寸（約九糎）、他の一つには二寸半（約七・五糎）の氷を貯え、氷にかぶせる草は各室五百束必要—などと墨書されている。裏側には、平城遷都間もない「和銅五年（七一二）二月一日」の日付がある。

小さい木簡には、表側に「狛首多須万呂（こまのおびとたすまろ）　進氷（たてまつるこおり）」と搬送責任者と思われる人名から書き出し、和銅四年と推定される年の六月から翌月の閏（うるう）六月の間に十数回、馬一頭の積載量と考えられる「一駄（約八十六瓩）」から「五駄」までの搬送量と日付を列挙。

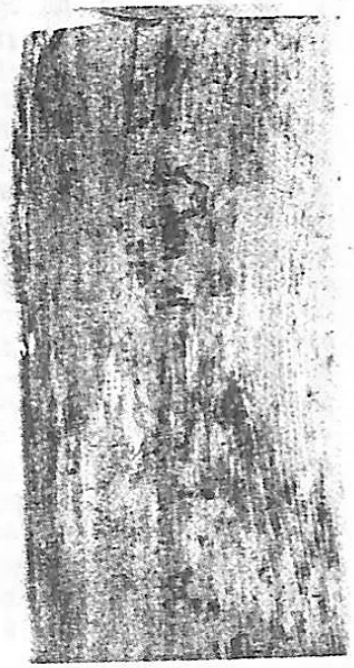
裏には「都祁氷進始日」（つげのこおりすすみはじめるひ）と書き始め、七月から八月にかけて二十回近く搬送した記録や、人間二人がかつぐ量の「二荷」から五駄までの氷の量や日付などが記録されている。

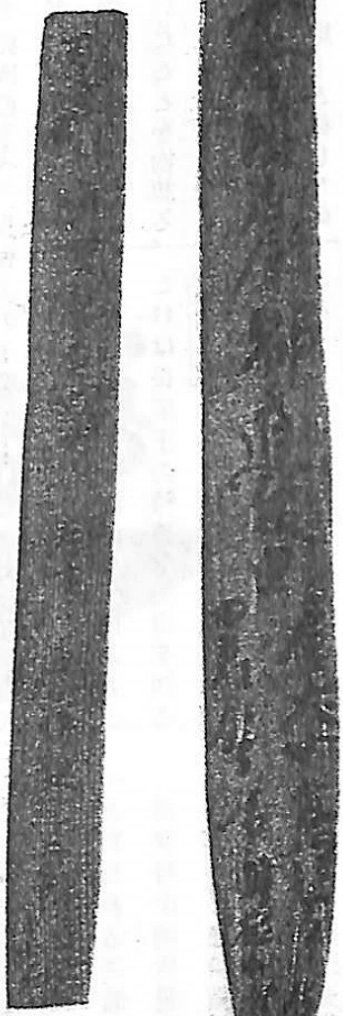
同研究所は▽木簡の中に

都祁氷室二□(処か)深各一丈

「都祁氷室」の規模や貯蔵する氷の厚さ、必要な人数などを記した木簡

（赤外線フィルム使用）





赤部国志摩郡進物里　戸主犬甘直稱万呂戸口
巴豆前呂御海松廿斤

百済郡南直事長百済部若末呂草三束米十一斛　上二石　中十石

加須海毛瓜　加須海鮒鮨須比　四
進物　冒海毛瓜　右冒物　九月十九日
冒海名寂

右＝志摩（三重県）から海藻の海松（みる）を送った際の木簡

中＝摂津（大阪府）の百済郡から百済部若末呂（くだらべのわかまろ）が出三台で米十二石を運んだことを記す木簡

左＝糟（かす）漬けのウリなど四種類の漬物に付けられた木簡。長屋王家への進物だったことを示す

少書吏という長屋王家の家政を司る朝廷派遣の役職名が記されている▽氷の搬送に金を払っている—などから、この氷室は長屋王家専用だった可能性が高いと見ている。このほか長屋王家に糟清けのウリと韓（から）ナスビ、醤（ひしお）清けのウリとミョウガを進物として送った木簡をはじめ、摂津（大阪府）の百済郡から車三台で米十二石を運んだ木簡、志摩（三重県）から海藻の海松（みる）を運んだ木簡などが公開された。

昭和六十三年十一月二日、「皇后宮」と記した木簡七点が公開された。「皇后宮」の木簡は天平七—九年（七三五—七三七）ごろのものと見られ、当時、北約五百米の法華寺（昭和五十六年五月、郷土研究会の旅行で参拝）付近にあった光明皇后（七〇一—七六〇）の宮から溝伝いに流れてきたと推定される。古代、天皇と皇后は内裏で一緒に住んでいたとされるが、臣下から初めて皇后になった光明皇后は独立の宮に住み、夫が妻の宅を訪れる「招婿婚（しょうせいこん）」の形をとっていたことを裏付ける資料といえる。「皇后宮」の木簡は北側の溝から出土したもので、長さ十八糎、幅三糎、厚さ一粍。「二門」「皇后宮」と、「佐伯」「日下」など七人分の人名を記し、「合七人」と結んでいる。皇后宮の第二の門に門衛を七人配置するといった意味らしい。

光明皇后は藤原不比等の娘で、聖武天皇の皇太子時代に十六歳で妃となり、天皇即位とともに夫人（ぶにん）、天平元年（七二九）に皇后となった。平城宮の東隣にあった父・不比等の旧宅が皇后宮にあてられ、天平十七年、この皇后宮が「宮寺」となり、まもなく「法華寺」と呼ばれるようになったことが正史・続日本紀や、正倉院文書などからうかがわれる。同寺境内の発掘でも皇后宮とみられる掘っ立て柱建物跡が確認されている。

同研究所は十二月三日、「長屋王家木簡」の中に「氷高親王（ひだかしんのう）」と読める木簡が含まれていたことを明らかにした。長屋王の妻、吉備内親王の姉で、のちに元正天皇（在位七一五—七二四）となる氷高皇女を指しており、藤原氏の陰謀のため吉備内親王ら家族とともに滅びる長屋王家の重要資料として注目を集めた。

この木簡は、表に「備後国葦田郡葦田里」裏に「□高親王宮　春税五斗」と記されている。□は墨が薄れ、赤外線撮影でも判読できないが、当時、他に「高」の字がつく親王、内親王がいない。長屋王の妻、吉備内親王は氷高皇女の妹で、極めて近い関係にある。—から□は「氷」と判断された。

氷高皇女は草壁皇子の長女で文武天皇の妹にあたり、霊亀元年（七一五）、母の元

創業嘉永元年　きものと共に130余年
高級呉服の専門店
とくさや
山崎町本町（さつき通）
☎(0790)62-1680代

明天皇に代わって即位。在位中、養老律令の編纂や、三世一身の法発布などを行った。生涯独身を通し、「続日本紀」に収められた元明天皇の譲位の詔には、もの静かで美しいという意味の「沈静婉嫕（ちんせい　えんれん）」と表現されている。

木簡の記載は「備後国（広島県東部）から氷高皇女の宮に、臼（うす）で舂（つ）いた精米済みの米五斗を税として届けた」と読まれる。木簡は、その荷札らしい。

長屋王邸から「氷高親王」の名を記した木簡が出土したことについて、▽近辺に氷高皇女の宮があった▽いったん皇女の宮に納入された荷が、長屋王邸に移され、木簡も一緒に動いた—などの可能性が指摘されている。

「以大命符（おおみことをもってふす）と書かれた、長さ二十六・六糎、幅二・六糎、厚さ三粍の木簡も発見された。表に「吉備内親王大命以符　婢莒入女進出□」、裏に五月八日少書吏国足家令　家扶」と記されており、吉備内親王の命によって、莒入女（はこいりひめ）という奴婢（ぬひ）を差し出せという意味。この記載によって吉備内親王の命令が「大命」と呼ばれていたことが明らかになった。

木簡群全体は▽各地の産物を長屋王邸に貢ぎ物として搬入した際の荷札▽長屋王家の物品担当役人への物品請求文書▽物品担当役人からの支給記録—の三種類に大別され、長屋王と吉備内親王は、それぞれ別の家政機関を持ちながら、物品は一括して長屋王邸で管理されていたことがわかった。

十二月二十三日、長屋王の妃や王子、王女など一族八人の名などを記した木簡十点の写真も公表された。

平成元年に入り、渡来人系の画家とみられる名前が記された木簡、猿を描いた土器、ツルの墨画土器、貴人の横顔らしい墨画の土器、鮭、鯖、鴨等の食料品や土器類の価格を記した金銭出納記録をはじめ、高貴な染料・紫草の種子を九州・太宰府から運んだことを示すものや、漢詩を書いた木簡、ネズミ二十頭を献上したことを記した木簡、聖武天皇が天平八年（七三六）、吉野離宮（奈良県吉野町）に行幸された際の木簡、「銭出挙」（ぜにすいこ）の木簡、等々が発見され解明が進められている。これらの木簡については、（其の二）に記述することにしますが、一三〇〇年前の奈良の出来事が目のあたりに現出することは誠に興味深いことです。

（続く）

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL⑫0036

田井遺跡出土の銅鐸形土製品について

片山昭悟

一・はじめに

山崎町田井のほ場整備の遺跡確認調査において、昭和六十三年十月十九日に、全国でもめずらしい銅鐸形土製品が出土しています。今回は、銅鐸形土製品についてご紹介します。

田井遺跡は、揖保川中流域の大きく蛇行した右岸の自然堤防上に立地した、縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世にわたる複合遺跡です。

北地区の排水路敷中央付近で、弥生時代中期後半の銅鐸形土製品が出土しています。

二・田井遺跡の銅鐸形土製品について

銅鐸形土製品は、地表より約七〇cm掘り下げた位置で鈕（上の半円部分）を北に向け、ほぼ水平な状態で出土しています。

土製品は、高さ一〇・七cm、鈕高二・六cm、身の高さ八・一cm、身の上端幅長径五・五cm、短径三・二cm、身の下端幅長径八・一cm、短径六・九cmであります。

鐸身部には、線刻で綾杉文様が全面に描かれ、肩（舞）部には横方向に二つの孔があり、一つは貫通しています。

身には鰭状の高まりが認められ、裾にかけて広がっています。裾端部は玉縁状に膨らみます。肩部と内面はヘラ削りを施し、色調は淡褐色で一部に青灰色が認められます。

胎土は、〇・五㎜大以下の砂粒を含み、焼成は良好です。全体的にシャープなつくりをしています。銅鐸と感じがよく似ています。

銅鐸形土製品は、銅鐸を粘土で模倣した小さいもので土製品と呼びます。銅鐸の形を頭の中に浮かべて粘土で焼き上げたものです。

田井遺跡出土の銅鐸形土製品は、銅鐸の製作者ではないことがわかります。

銅鐸を見た人が、強く印象に残って銅鐸を模して作ったもので、とくに、銅鐸のどこかに使われていた綾杉文様と銅鐸の身の反りと舌をつるす孔を意識して作ったものと考えられます。

銅鐸形土製品は、全国でもこれまで五十例ほど出土していますが、一つの文様で統一した土製品は大変めずらしく、完全なままで出土しているのは非常に例が少なく、全国の出土例を調べてみても、ほとんどのものが、鈕が欠損した破片及

本のある生活を——
さつき書房
山崎町鹿沢55-3
☎(0790)62-4674

び身の一部分のみで出土しています。

銅鐸形土製品の出土した上層で河原石を含んだ氾濫の堆積が土層の断面で認められ、これによって流れてきたものと思われる弥生土器畿内Ⅲ～Ⅳ様式の壷・高杯・甕などが多く出土していることから時期的には弥生時代中期後半のものではないかと考えられます。

銅鐸形土製品の出土例は、一般には集落内より発見される例が多く、排水路敷の周辺に集落が存在するものと考えられます。

三・銅鐸形土製品とは

奈良国立文化財研究所調査指導部長の佐原真先生に鑑定していただいたところ、「全国的にも優秀な作品であり、全体を綾杉紋で飾って美しく仕上げている。

銅鐸の鋳造技術者が作ったものではなく、一般の弥生人が印象をもとに作ったもので、銅鐸が公共の祭りに使われたのに対して銅鐸形土製品は、私的な祭りに使われたものである。」とご教示いただきました。

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-25　兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL（0790）62－7588
FAX（0790）62－7589

四・田井遺跡出土銅鐸形土製品の製作及び土製品の意義

田井遺跡の銅鐸形土製品の製作者は、日常的に銅鐸を見ているか、あるいは、銅鐸の鋳造者と何んらかの接触する機会を持っていたものと思われ、弥生時代中期の生活文化圏の範囲内であったものと考えられます。

宍粟郡の銅鐸出土例は、山崎町青木出土の青木銅鐸・山崎町須賀沢出土の須賀銅鐸・一宮町閏賀出土の閏賀銅鐸・千種町岩野辺出土の岩野辺銅鐸が知られています。

銅鐸形土製品と時期的には、青木銅鐸と閏賀銅鐸がほぼ同じ時期のものと考えられます。

青木銅鐸は、扁平鈕式四区画袈裟襷文銅鐸で身の下区画に渦巻文が認められ、鈕の部分に鋸歯文と連続渦巻文が認められます。時期的には、中期でも古く、土製品と比較しても文様から模しているようには思われませんが、田井遺跡から位置的には、直線にして約八㎞西にあり、当時の弥生文化圏の範囲内ではなかったかと考えられます。銅鐸の外観から、土製品の身の反りが似ているようにも思われます。

また、田井遺跡の北へ四㎞の位置で一宮町閏賀の山裾において閏賀銅鐸が出土しています。閏賀銅鐸は、扁平鈕式六区袈裟襷文銅鐸で時期的に、中段階のもので、鈕の中央部分に綾杉文が描かれ、綾杉文の方向を丁寧にふりわけています。

このことから、閏賀銅鐸を模したとすれば、銅鐸形土製品の製作者は、閏賀銅鐸を見て、とくに鈕の部分の綾杉文が強く印象に

残ったものと思われます。

銅鐸の形を真似た土製品を用いて祭祀を行ったもので、出土した地点から考えられることは、弥生時代の農耕社会に欠くことができない水を揖保川から導水していたものと思われ、米づくりにとって一番大切な水に対して田井の弥生人は、祭祀に用い、揖保川に近いことから幾度かの洪水を鎮めるための祈りを銅鐸に代用するものとして、銅鐸形土製品を用いて祭祀を行ったり、豊作を祈るための農業祭祀として使用されたものではないかとも考えられますが、いまだにはっきりと断定することは出来ません。

銅鐸形土製品の出土は、兵庫県下でも初めての出土であり、今後も調査において発見されるものであろうと思われます。

今回の出土により宍粟の弥生銅鐸文化を考える上で貴重な資料が得られました。

なお、銅鐸形土製品は、山崎町歴史郷土館に展示されていますので一度ご覧ください。

五・宍粟郡内の銅鐸及び銅鐸関連遺物について

銅鐸	出土地	出土年月日	器高	型式	保管場所
「青木銅鐸」	山崎町青木出土	昭和三十五年（一九六〇）	高さ三一・四㎝	扁平鈕式四区画袈裟襷文	文化庁 山崎町歴史郷土館
「須賀銅鐸」	山崎町須賀沢	江戸時代（寛政二年）一七九〇	高さ約一〇〇㎝	突線鈕式六区画袈裟襷文	不明
「閏賀銅鐸」	一宮町閏賀西山	明治四十一年（一九〇八）	高さ四二・二㎝	扁平鈕式六区画袈裟襷文	辰馬考古資料館
「岩野辺銅鐸」	千種町岩野辺字穴尾	昭和五十五年（一九八〇）	復元高約一一〇㎝	突線鈕式	鈕のみ出土 千種町郷土資料館
石剣					
「伊和石剣」	一宮町伊和	昭和五十六年	一ッ山古墳東		
「金谷石剣」	山崎町金谷	昭和六十三年	金谷一号墳付近		

参考文献

山崎町教育委員会『田井遺跡出土銅鐸形土製品について』一九八八年

山崎町『山崎町史』一九七八年

垣内　章『ふるさと安富』一九八五年

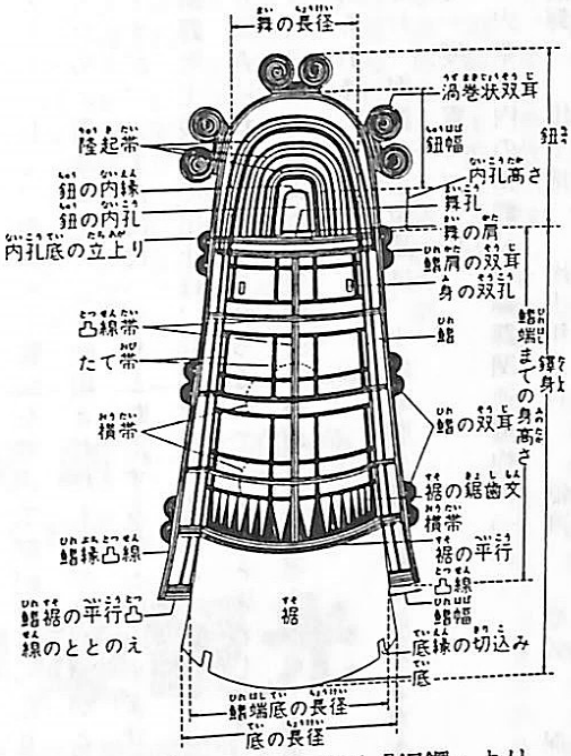
山崎町教育委員会『三津群集墳』一九八七年

三木文雄『銅鐸』一九八三年

辰馬考古資料館『銅鐸』一九七九年

上田哲也『播磨弥生文化の研究』一九六六年

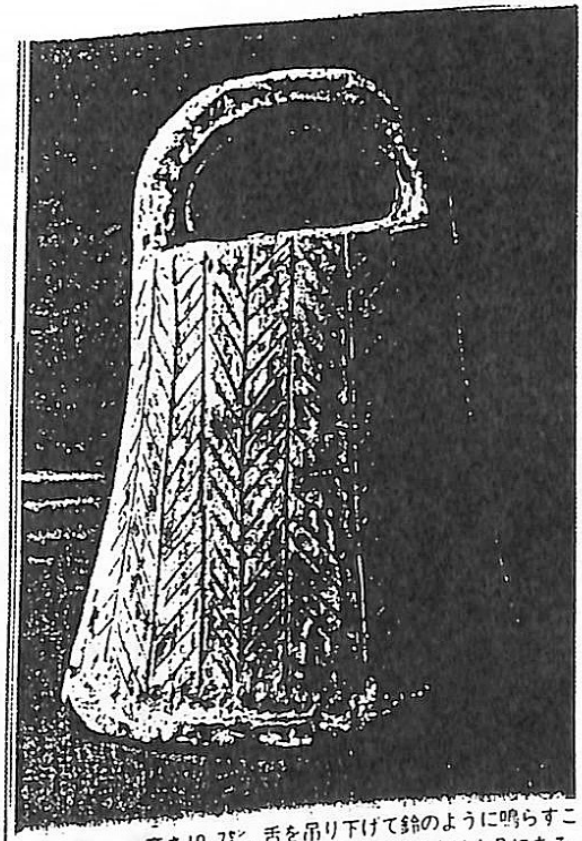
『アサヒグラフ』一九八九年一月二十日号



銅鐸各部の名称　三木文雄『銅鐸』より

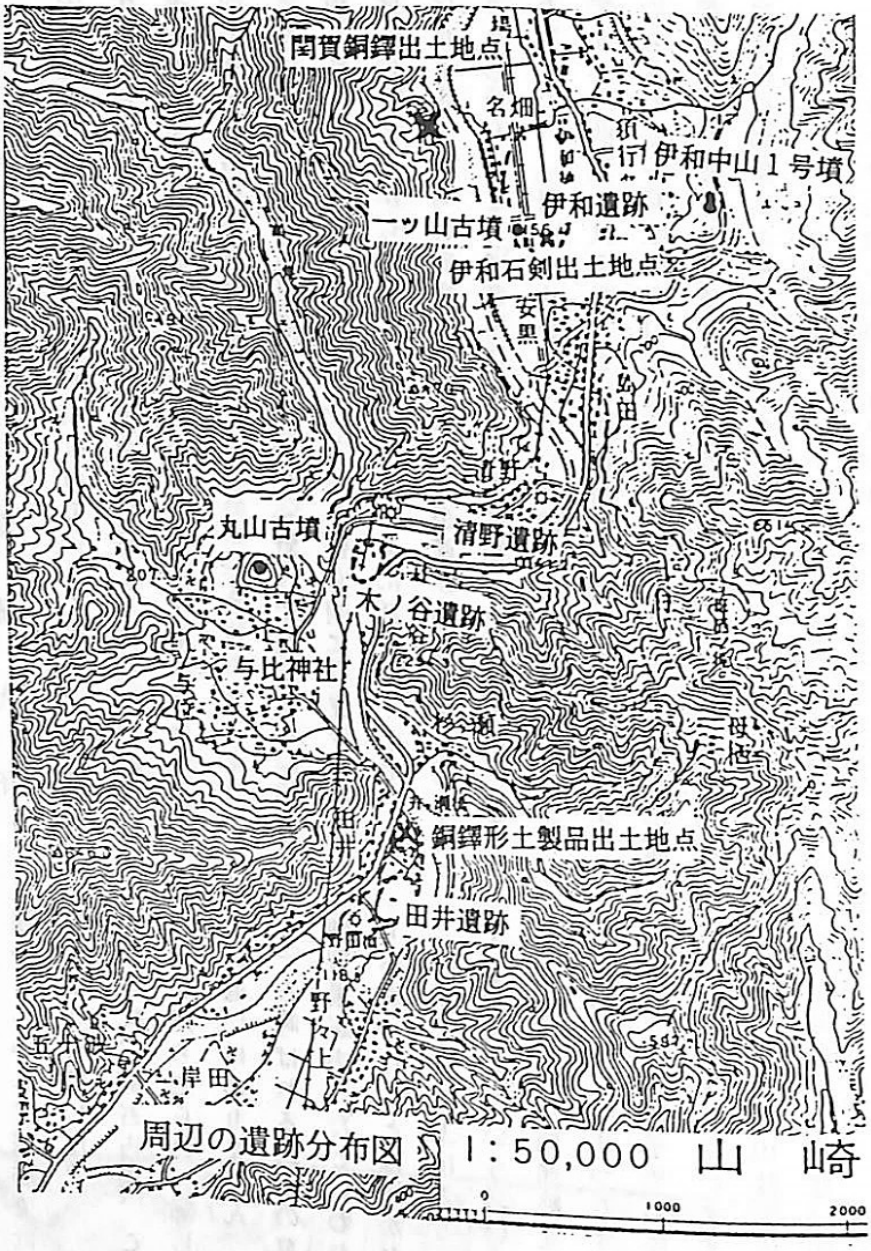
個人の祭祀用か 完形のミニ銅鐸形土製品

兵庫県山崎町・田井遺跡



高さ10.7㌢。舌を吊り下げて鈴のように鳴らすことはできないが、視覚的に訴える力は十分にある。

アサヒグラフ 1989・1・20



周辺の遺跡分布図

表装全般　…古いものを
大切に…

表具師　松本永春堂

山崎町鹿沢本通り
TEL. 62－0122

野々上の歴史を求めて

進藤光子

全国各地で「村おこし運動」が叫ばれているこの頃、私達の村が、生涯学習推進モデル地区の指定を受けることになり、総代より私達婦人で作っている「生活改善ひまわりグループ」にその事業の取り組みの依頼を受けました。

そこで、結成当時から話題に出ていた「野々上道しるべ」の立て看板を作ることになったのです。下絵を書く前に、まず自分達の地域を知ることから始めました。村の長老に話を聞く中で、この地区にも古くからの歴史や貴重な文化遺産が散在していることを知りましたし、また、意外に地元の人に知られていないことも分かりました。「野々上史跡めぐり」と題して一般にもよびかけたのですが、時期的に悪かったのか期待はずれの人数でしたが、小雪のちらつく一月二十八日会員と他十名ばかりで、野々上の歴史探策に出発しました。まず、天神谷古墳に行きました。うっそうと繁る杉林の急傾斜地にこんもりとした盛土のある横穴式古墳が残っていました。六世紀後期のもので宇原、金谷、矢原などに群集しているのとほぼ同時期のようです。

そして、その日の主目的地「都ケなる」を目指して登りました。山頂近くには雪があり、霜柱やつららなど下界では見ることの出来ない自然現象に感激しました。頂上から見る景色はすばらしく、遠くには伊和神社の森、田井・杉ケ瀬・五十波が一望でき、長水山や野口神社の社が真正面に見える、とても見晴らしのいい所でした。ここに城があっても不思議でないと納得できましたが、私達のもしかして城跡ではというロマンも、その確証を掴むことができませんでした。

つぎに、塚谷古墳、ここも天神谷古墳と同等のもので、石の大部分が持ち去られ一部しか現存しておりませんが、古墳であることに違いはありません。他に、野山のあちらこちらに「ごりんさん」と呼ばれる武士の墓があることや、「馬場田」と呼ばれる馬の練習場があったといわれる所もあることから、長水城とのかかわりがあったことは確かなようです。

南から野々上に入ると、すぐ右手に地蔵さんが目にとまります。イボが治るという言い伝えがあり、「イボ地蔵さん」とも呼ばれています。一時期途絶えていたのですが、子供の事故が相次ぐことから、またおまつりするようになったとかで、地蔵盆には地区の子供達にお菓子やおにぎりで「お接待」をして、子供達の健康を願う行事をしています。

浄土宗永尾山陸雲寺は、またの名を鹿苑寺ともいい、千葉兵庫助が開基し、創建は明暦三（一六五七）年とも正徳元（一七一一）年ともいわれています。同寺で大野善太夫が寺子屋を開いた事も記録に残っています。

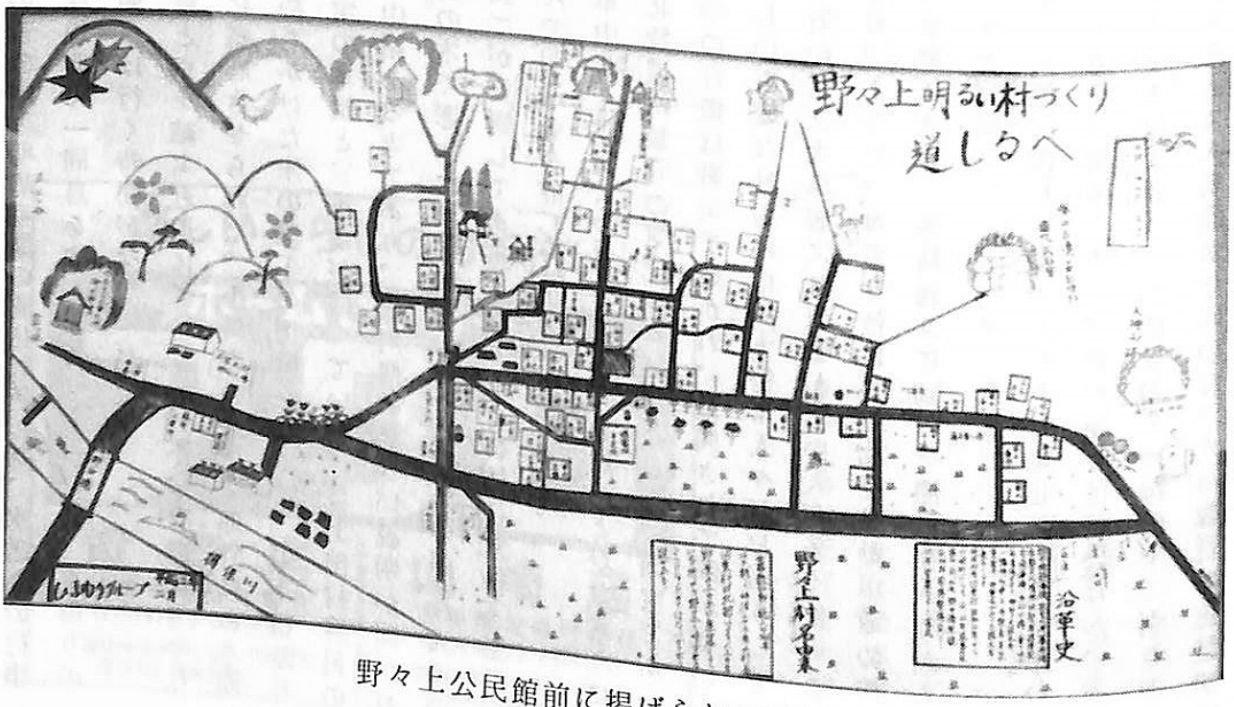
真言宗東雲寺は天文二十三（一五五四）年宗専が開基し、廃寺となっていましたが再び寺を興され、弘法大師さまが祭られて宍粟六

十七番礼所となり、阪神方面からの信者もあり、地区のお年寄りの憩の場となっています。真言宗西雲寺は永禄六（一五六三）年長祐の開基と伝えられていますが、廃寺となっています。昭和五十四年度に圃場整備された水田のなかに「寺町」と呼ばれた水田名があったことから、そのあたりではなかったかと言われています。

また、村の氏神として岩清水八幡神社があります。春と秋に大祭があり、子供相撲や子供みこしなど村民あげての祭りが行われています。近くに薬師堂があって、首から上の病が治るとの言い伝えがあり、最近では目の悪い子供達が、手を合わせる姿も見受けられます。

村の北端部の「釜ケ岨」にひっそりと宍粟六十八番札所があります。その昔お遍路さんが立ち寄り、清水ケ谷の湧き水を飲んで旅の疲れを癒したようです。

最近では、自然と触れ合う機会が少なくなって、この日参加した私達子供達が流した汗は、いつまでも心の奥にさわやかな思い出として記されたことと思います。子供達の心を育ませ、また、大人のふるさとへの思いを呼び起し、楽しく豊かな財産として語り伝えていく必要があるのではないかと痛感しました。



野々上公民館前に掲げられた看板

秋の研修旅行

志水美好

平成元年十月四日、若狭路を尋ねる日である。朝の天気予報を聞くと、京都北部に大雨警報が出ているし、気がかりな空模様である。私達九十名は二台の車を連ねて、定刻より早目に山崎を出発した。舞鶴自動車道に入ると、空はどんより曇っていたが雨にはならず、舞鶴港についた頃には、雲の切れ目に青空も見えるようになりほっとした。港には自衛艦や潜水艦の姿も見えた。「岸壁の母」の説明に耳を傾けつつ車を進める。二十九番札所松尾寺を北の山麓に望んだが、大型車は入れないので通過する。高浜町に入ると若狭湾も波が高かった。小浜市に着いたがどんより雲厚く道は雨後でぬれていた。

まず妙楽寺に参詣する。谷川を渡り木立の中の道を通って本堂に入る。案内の奥様の詳しい説明を聞く。本堂の特殊な構造、千手観音（重文）の立派さに感心する。

次は郊外にある若狭一の宮である若狭彦神社（上社）に額づく。幽玄の気ただよう深い森の中に立派な本殿があった。引き返して下社である若狭姫神社にも詣る。国幣中社の標柱が入口に立っているし、お宮のつくりは上社とそっくりだった。しかし、ここには立派な能舞台や社務所があった。

続いて、奈良二月堂へお水送りの寺として有名な神宮寺へ参拝した。神仏混淆の昔の話、明治初期の廃仏毀釈の話、水送りの行事等、役僧の上手な説明に一同耳をすませて聞き入った。水送りの神事がある鵜之瀬へは行く時間がなかった。

若狭は古代朝鮮と京を結ぶ近道に当ったせいか、立派な寺や仏像が沢山あるのに感心させられた。小浜市の遥かな郊外にある明通寺を尋ねる。朽ちかけた朱の欄干の桐橋（ゆずり）を渡って、少々石段を登った所に、国宝の本堂と三重塔が建っていた。坂上田村麻呂の創建といわれる由緒ある寺であり、案内僧の詳しい説明が聞かれ有難かった。桐（ゆずり）の木で彫った薬師如来、降三世明王、深沙大将の三体（共に重文）が安置してある。帰りがけに持仏堂の不動明王（重文）を拝んで明通寺を辞し、小浜を後にした。

三方五湖は車中から眺めるだけで、一路敦賀へとひた走りに走る。四時過ぎ北陸道総鎮守の気比神宮に到着した。国宝であった本殿はじめ四つの社殿は戦災で焼かれ、復興されて間がないらしい朱塗りの新しい奇麗な社殿には、大勢の人々がお詣りしている。ここで唯一の古い重文大鳥居には気づかない人が多くて、こちらは人影もまばらであった。神宮を後にして北陸自動車道の傍らにある北国グランドホテルへ五時過ぎに到着。温泉に入り漸くくつろぐことが出来た。

十月五日漸く天候回復して晴天となり安堵した。八時半、宿を発って西近江街道を一路南下する。琵琶湖畔に着いたが、巡路の湖岸の道路が崖くずれで通行止めになっていたので、引き返し稍々遠回りの道を辿って大崎観音へ向った。大崎観音は琵琶湖に臨

んだ景勝の地に建てられ、本堂からの眺めも大変よかった。泰澄大師の作といわれる十一面観音さまは、厄除、開運の御利益あらたかな観音さまだそうだ。阿弥陀堂から木立の中の遊歩道を進んでみる。岬の突端からは遥かに竹生島も見えて美しかった。時間は充分あったのだが、旅の疲れが出たのか早々とバスの方へ引き返している人が多かった。奥琵琶湖ドライブインで一休みして、賤ケ岳古戦場のある山麓を通って、木之元インターから北陸自動車道を南下する。

彦根インターで名神道をおり、多賀大社に進む。広い境内には立派な社殿が多く建っている。祭神は伊邪那岐尊、伊邪那美尊で「お伊勢参らばお多賀へ参れ。お伊勢お多賀の子でござる」といわれるように、大勢の参拝客で賑わっていた。秀吉が寄進したといわれる太閤橋を渡ってみる。門前町のお土産物店でそれぞれ適当に買物を楽しんでおられた。

多賀大社に詣ってから、また彦根へ引き返して昼食をとり、最後の見学地百済寺に向った。大きな草鞋のさがっている仁王門を通り、かなりの急勾配の参道を皆黙々と一緒に登っていくとやがて本堂に着いた。折角遠い山上まで登ったのに、ここは案内僧も居ないし、本堂は扉を閉したままでがっかりした。山からおりて駐車場に近い喜見院の庭園で一同一くつろぎをする。池泉廻遊式のきれいな庭で、石組みも見事であった。右手の小高い山からの眺めもすばらしいし、池を泳いでいる大きな色鯉は私達の目を楽しませてくれた。この庭で記念写真を撮られた方も多かった。

八日市インターから名神道に乗り帰途についた。大津までは順調に走って予定より早く帰れそうだと喜んだのも束の間、天王山で五台の玉突き事故が発生して交通渋滞にまきこまれてしまった。京都南から桜井まで三時間程もかかってしまい、結局予定より二時間おくれて午後八時にやっと山崎へ帰着した。

平成元年の研修旅行で、若狭路のすばらしい寺に参詣して仏縁を得たことを嬉しく思っています。また皆様の絶大な御協力で有意義な旅行ができましたこと、衷心よりお礼申し上げます。

楽しいくらしのお手伝い
ホームセンター
アグロ
竜野店
竜野市竜野町富永
☎(0791)63-3226(代)
営業時間AM10:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日
山崎店
宍粟郡山崎町今宿
☎(0790)62-2434(代)
営業時間AM9:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日

蔵書の活用について（其の五）

事務局

会報第71号から引き続き蔵書の紹介をいたしておりますが、

これの利用については会報71号15頁をご覧下さい。

書　　名	著者又は発行所名	備　考
中国、唐長安の文物	兵庫県立歴史博物館	
遣唐使物語	仝　上	
兵庫県史　史料編（近世１）	兵庫県	
歴史手帖　平成元年9月号より平成2年2月号まで	名著出版	
歴史と神戸　第28巻 第５号 第６号	神戸史学会	
神戸史談　２６６号	神戸史談会	
兵庫紙幣史の研究 第15号から第17号まで	兵庫紙幣史編纂所	
可不可	安井道夫	
少年　６８号　７０号	寺本躬久	
機関紙「風」第21号から第24号まで	日本風土記の会	
季刊「河」	加古川流域史学会	

株式会社
安井書店
宍粟郡山崎町山崎90
ＴＥＬ山崎㊷0700(代)

事務局だより

一、春の研修旅行案内を会報に挿入していますので、参加希望の方は早目に申し込みください。

二、会報No.75配布と同時に本年度の会費一、〇〇〇円を地区幹事さんにご集金よろしくお願いいたします。

（山崎郷土研究会臨時事務局）

山崎町　　堀口春夫宅